

博士論文審査結果の要旨

学位申請者 牛 嶋 壮

主論文 1 編

Visual analog scale questionnaire to assess quality of life specific to each symptom of the international prostate symptom score.

The Journal of Urology 176:665-671, 2006

審 査 結 果 の 要 旨

下部尿路症状の重症度評価には、国際前立腺症状スコア（International Prostate Symptom Score: IPSS と略）が広く用いられている。IPSS では7項目の下部尿路症状の頻度が0点の「まったくない」から5点の「常に」までの6段階で点数化されており、その合計点数は患者の生活の質（Quality of life: QOL と略）と関係しているものの、各項目の重症度は各患者の悩みとは相関しておらず、IPSS による QOL の評価には限界があった。

申請者は、Visual Analog Scale (VAS) で IPSS の各症状に特異的な QOL を評価する質問票を作成し、再現性と疾患の影響および治療効果判定における有用性を検討することを目的として、京都府立医科大学泌尿器科外来を受診した 246 名の男性患者を対象に IPSS と VAS 質問票による調査を行った。7つの質問各々における IPSS と VAS の相関、排尿状態全体の QOL をスコア化した IPSS-QOL に対する VAS と IPSS の相関の比較、IPSS7 項目および VAS7 項目で最大スコアの症状と患者の主訴の関係について分析した。また多変量解析を用いて IPSS の7項目と VAS の7項目を合わせた 14 項目の IPSS-QOL に対する予測因子としての評価を行った。健常男性 55 名と下部尿路症状を有する男性 44 名では治療を行うことなく 1 ヶ月の間隔をおいて再調査を行い、信頼性と再現性を評価した。さらに $\alpha 1$ 遮断薬による内服治療を行った患者 46 名には治療前に加えて治療後 4-6 週目に再度調査を行い、治療による VAS スコアの変化と IPSS-QOL の変化について相関関係を分析した。

患者と健常男性の VAS スコアの比較では全項目で有意に患者群のスコアが高く、再現性の検討では健常男性および患者ともに両質問票で 2 度の回答間に高い相関を認めた。IPSS と VAS の同じ項目の回答間には有意な相関関係を認めたが、IPSS における最高スコア項目と主訴の一致率は 58%であったのに対し、VAS における一致率は 69%であった。両質問票の各項目と IPSS-QOL との相関関係の比較では、全項目で VAS 質問票の相関がより高かった。VAS および IPSS 質問票の全 14 項目での IPSS-QOL を予測する因子の多変量解析では、夜間頻尿の VAS スコアが最も有力な予測因子であり、頻尿と残尿感の VAS スコアがそれに続く独立予測因子であった。 $\alpha 1$ 遮断剤による治療前後での IPSS-QOL と主訴項目のスコア変化の相関を検討したが、これも IPSS と比較して VAS の変化のほうが高い相関関係を認めた。本研究により、下部尿路症状の評価における QOL をよく反映した指標として、VAS 質問票が良好な妥当性を有していることが示された。

以上が本論文の要旨であるが、IPSS 質問票と VAS 質問票の併用により重症な下部尿路症状と QOL に最も影響する症状を同時に見極めることが可能となり、下部尿路症状患者の的確な治療選択に寄与できると期待され、医学上価値ある研究と認める。

平成 25 年 10 月 17 日

審査委員 教授 八木田 和 弘 ㊞

審査委員 教授 酒 井 敏 行 ㊞

審査委員 教授 加 藤 則 人 ㊞